中世・草戸千軒探検⑫

～灯す～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を紹介しています。

前回は、「食べる」のコーナーに展示した食器を紹介しました。今回は、闇を照らす「灯り」に関係する道具を、展示室の「灯す」のコーナーに展示した資料によって探ってみましょう。

小さい頃、夜中に一人でトイレに行くのは怖くなかったですか？私は今でも、真っ暗な場所に一人で行くのはいやですね。

電気のなかった中世の人々にとって、私たちが想像する以上に闇夜は恐ろしいものだったに違いありません。そうした闇を照らす唯一の道具が、「火」だったのです。闇夜を照らし、暖を取るため、火おこしは必要不可欠な生活の技術だったのです。もちろん、マッチやライターはありません。

草戸千軒町遺跡から出土した火打金

足駄作りの家の台所に再現した火打金と火打石

中世の人々の主要な火おこしの道具は、火打金と火打石です。鉄と石を打ち合わせたときの火花を、燃えやすいものに移して火をおこしていました。遺跡からも、数点の火打金が出土しています。

火がおきたら、油を入れた灯明皿に挿した灯芯に火を移します。当時は、シソ科の植物であるエゴマの種子を絞って得た油が使われていました。灯芯は、麻布を細く撚ったものや、藺草の芯にあるずいが利用されていたようです。

遺跡からは、縁の部分に黒く煤の付いた土器の皿がたくさん見つかっており、これらが灯明皿として使われたことがわかります。また、灯明皿を置くための灯明台や、土製の釣灯籠、燭台（蝋燭立て）など、灯りに関するさまざまな道具が出土しています。

灯明台の上に置いた灯明皿

土製の釣灯籠

草戸千軒の人々はこうした道具によって明かりを灯し、こわ～い闇夜を追い払っていたのでしょう。

（主任学芸員　鈴木康之）